



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	米国の教師教育者にみる professional identity の多様性 : 社会科教育を事例とした教科観と教師教育者観に着目して
Author(s)	岡田, 了祐
Citation	[岐阜大学教育学部研究報告. 教育実践研究・教師教育研究] vol.[20] p.[55]-[65]
Issue Date	2018
Rights	
Version	聖徳大学大学院教職研究科 / 国立教育政策研究所 / 静岡大学教育学部 / 日本女子大学人間社会学部 / 鹿児島大学教育学部 / 岐阜大学教育学部
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/75039

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

米国の教師教育者にみる professional identity の多様性 —社会科教育を事例とした教科観と教師教育者観に着目して—

The Diversity of Professional Identities amongst Teacher Educators in the United States :

With a Focus on Views on Curriculum and Teacher Educators in Social Studies Education

岡田了祐*・堀田 諭**・村井大介***・渡邊巧****・田口紘子*****・田中伸*****

This paper is a case study of three teacher educators involved in social studies pedagogy at the same American university. It analyses the personal identity (the teacher educators' views on teaching and research in their capacity as professionals) possessed by each by demonstrating the features of and differences in how each engages with teaching and research as evident from an interview survey. The three educators are Bruce VanSledright, Jennifer James, and Sonia Janis.

Specifically, the procedure was as follows. Firstly, we organised the three educators' views on teaching social studies and teacher education on the basis of an emergent method as well as designed an analytic method and framework for speech. I designed these by holding a seminar after having read through the contents of the interview protocols, carefully analysing and faithfully deriving points at issue from the speech of the three educators. This allowed me to construct the paper's central themes. As a result, this paper revolves around the three themes of (1) Background of Teacher Educator (analysis of research interest and duty situation), (2) the mission of a teacher educator as seen from the aims of social studies (analysis of view on social studies), and (3) the mission of a teacher educator as seen from social responsibility (analysis of view on teacher educators).

Next, we examined the interview speech to analyse how each of the three teacher educators understood the three abovementioned perspectives. Based on this, we derived each person's professional identity and compared them. As a result, professional identity appeared in various forms, despite being involved in social studies education at the same university. Moreover, it emerged that this diversity of professional identities depended on differences in each person's view on society, view on teaching, view on research, and position at the university.

Keywords: teacher educators, professional identity, social studies, curriculum aims, social responsibility, diversity, life stories

本稿は、米国の同じ大学で社会科教育に関わる3名の教師教育者を事例とし、インタビュー調査を通して感じられた各々の教育・研究への関わり方の特徴と違いを示すことで、各々が持つ professional identity (専門職としての教師教育者の教育観及び研究観) を分析したものである。対象とした3名とは、Bruce VanSledright, Jennifer James, Sonia Janis である。

具体的な手続きは次のとおりである。まず、3名の社会科教育観及び教師教育観についてエマージェント法を参考にして整理し、語りの分析方法と枠組みを設計した。設計の方法は、インタビューのプロトコルを読み込んだ状態で研究会を行い、3名の語りを読み解きながら、語りから見える論点をプロトコルの内容を基に忠実に導き出し、論文構成の軸となるテーマを構築した。その結果、本稿は①教師教育者の背景 (研究関心と勤務実態の分析)、②社会科の目標から見る教師教育者としての使命 (社会科観の分析)、③社会的責任から見る教師教育者としての使命 (教師教育者観の分析)、という3つの軸を取った。

次に、3名の教師教育者が上記3つの視点をどのように捉えているかをインタビューの語りから分析した。そして、それを踏まえ、各々の professional identity を導き出し、比較考察した。その結果、米国の同じ大学で社会科教育に関わっているのにも拘わらず、教師教育者としての在り方は、「指導者」「助言者」「媒介者」といった多様な形が現れていた。そして、その多様性から、各々の professional identity は、彼/彼女らのもつ社会観、教育観、研究観、大学における立場の差異によって現れていることが浮かび上がってきた。

キーワード: 教師教育者, professional identity, 社会科, 教科の目標, 社会的責任, 多様性, ライフストーリー

*聖徳大学大学院教職研究科 **国立教育政策研究所 ***静岡大学教育学部 ****日本女子大学人間社会学部 *****鹿児島大学教育学部 *****岐阜大学教育学部

1. はじめに

(1) 研究目的, 方法及び研究対象

本研究の目的は, 教員養成の基盤となる社会的, 文化的, 制度的, 歴史的状況を分析することを通して, 教師教育者が持つ professional identity の多様性を描くことである。professional identity とは, 専門職としての教師教育者の教育観及び研究観をさす。本研究は様々な地域や国の研究機関に勤務する社会科教育をフィールドとする教師教育者へインタビューを行い, 各々が考える社会科教育や教師教育の理念を調査している⁽¹⁾。研究方法は半構造化インタビューをベースとしたライフストーリー法である。一連の研究では, 研究者の教員経験, 研究関心, 大学での役割などに着目して, 各々が持つ社会科教師教育者としての教育観・研究観を調査するため, 以下の質問事項を設定した。

- ・デモグラフィクスの確認
- ・お互いの「典型的な一週間」を比べてみましょう。
- ・あなたのここ5年のおすすめの執筆物（論文, 原稿, 発信物などを含む）を3つ教えてください。
- ・あなたは「社会科」の目標を何だと思いますか。
- ・学校や社会とどのように関わっていますか。
- ・あなたの社会的責任をどのように定義しますか。
- ・「あなたは researcher ですか?それとも Educator ですか?」と尋ねられれば, どのように答えますか。

インタビューは, 第一に自身が特徴的だと考える1週間を設定してもらい, 当該期間のスケジュールに関する質問・対話を行う中で, 教育・研究・社会サービスに充てる時間とその必要性を尋ねる。これにより, 選択した週における仕事と生活, および活動の優先順位を明確にする。第二に, 過去と現在の研究関心について, 自身を代表する論文を提示してもらい, その内容を説明してもらう作業を通して時系列的に研究の移行と発展を抽出する。第三に, 自身の研究背景, キャリア, 社会科観, 教師教育観, およびその他の関連情報を聞き取る中で, 対象者に内在している教師教育者としての professional identity を調査する。

本研究は継続研究である。後藤は日本人研究者を対象に, 社会科教師教育者の多様性を明らかにしている。Tanaka らは日本とフィンランドの社会科教師教育者, 計4名を対象に調査・比較を行い,

各々の研究・教育・社会の3領域の捉え方とその関係性が大きく異なることを明らかにしている⁽²⁾。

本稿では, 米国の同じ大学で社会科教育に関わる Bruce VanSledright (ブルース・ヴァンスレッドライト), Jennifer James (ジェニファー・ジェームス), Sonia Janis (ソニア・ジェニス) の3名の研究者を事例とし, インタビュー調査を通して感じられた各々の教育・研究への関わり方の特徴と違いを示すことで, 各々が持つ professional identity を分析する。なお, インタビューは2016年度に田口紘子, 草原和博が米国にて実施した⁽³⁾。

(2) 分析枠組みの設定方法

本研究では, 3名の社会科観及び教師教育観についてエマージェント法を参考にして整理し, 語りの分析方法と枠組みを設計していった⁽⁴⁾。設計の方法は, 執筆メンバーがインタビューのプロトコルを読み込んだ状態で2017年9月10日, 11月12日, 12月17日に研究会を行い, 3名の語りを読み解きながら, 語りから見える論点をプロトコルの内容を基に忠実に導き出し, 論文構成の軸となるテーマを構築した。すなわち, 論文構成は目的論的に章立てを組む形ではなく, 執筆メンバー全員でプロトコルを分析しながら設計した⁽⁵⁾。

研究会では, はじめに論文の骨格と構成について議論を展開した。議論の軸は以下である。

- ・社会的責任とスケジュールは大きく関わっている中で, スケジュールを書いた方が良いのではないか。
- ・スケジュールで差別化をした方が良いのではないか。各々の特徴はスケジュールに出てくる。
- ・カテゴリー及びサブカテゴリーを設定し, 語りと行動を順番に説明していく。
- ・アイデンティティを考えるのであれば, スケジュールが大事になる。しかし, 教師教育者としての実践現場への関わり方にするのであれば, スケジュールは扱わなくても良いのではないか。

以上の議論の中で, 本論文の大枠としての目的は教師教育者としてのアイデンティティを分析することとした。その際には対象者の3名が自身のスケジュールに示した仕事の内容と重み付けを分析し, 各々が考える社会的責任を読み解くことにした。その後, 議論は以下のように展開をした。

- ・ジェニスは社会科教育の目的を明確に語っている。彼女の問題関心は、子ども達が十分な教育を受けていないことに焦点を当てている。ジェームスは、世界を考える異なった方法を紹介することとしている。これは、自身が不寛容で暴力的な状況にも直面してきたことが影響している。ヴァンスレッドライトは、子どもに彼らが住んでいる世界の理解を手伝うために社会科を教えるとしている。社会での問題状況から社会科を教えることは唱えていない。子どもの視点から何を伝える必要があるのかを述べている。この辺りで、語りの様式がかなり違っている。
- ・教師教育を専門として自覚的に語っているジェニスが世界を公平公正な場所にすると語っていることを、どう考えるのか。自分が置かれているポジションと研究観・教育観は関係あるのか？これは信念なのか？生い立ちが関係するのか？

ヴァンスレッドライトは、子どもの思考を先駆けて調査・分析している研究者である。氏の研究関心と出自の関係、及びジェームスやジェニスの研究関心と生い立ちの関係を読み解く必要性が指摘された。そこで、アイデンティティへ影響を与えている要素の一つとして自身の生い立ちが重要であることが共有され、出自と研究観との関連性に関する議論へと展開してゆく。

- ・ジェニスはNPOや団体に関わっている？ジェニスはクリニカル准教授。所属する大学に隣接する高校の実務家教員（学校に常駐する大学教員）をやっている。
- ・ジェニスは子どもや学校へ戻っていくことの重要性を語っている。それが彼女の社会観に影響を与えているのではないのか。
- ・ジェニスに対する違和感は、実務家的な発想なのに、一番哲学的なことではないのか？
- ・一番プラグマティックなのがジェニス？最も現実社会を考えている？
- ・ヴァンスレッドライトは「子ども」をどのように捉えているのか。子どもを如何に語るのかが見えない。
- ・「世界」の掴み方が難しい。ジェニスが言う世界は実社会。ヴァンスレッドライトの言う世界は社会文化的な世界。世界なのか、世界観なのかで違いがある。

この辺りから、議論は研究関心における子どもや世界の捉え方へと推移し、以下のように研究観

と社会科観と絡めたものへと展開した。

- ・社会科の目的、research interest とも関わっている。属性と interest などは繋げて考える必要があるだろう。
- ・目標、社会科のアイデンティティ、社会科の捉え方、社会科観が関係している？
- ・論文のタイトルをどうするか？
- ・我々が社会科教育の研究者なので、「社会科教育の目標」は何らかの形で入れておきたい。
- ・社会科の目標を軸にして書く形もあり得る。
- ・教師教育としての論文にするかどうか。専門家としてのアイデンティティとするのかどうか。論文の Research Question は？
- ・社会科教育観の多様性を示す論文はどうか？現在、社会科教育観が固定化されている。社会科教育の可能性をひらくことが大事。抜本的に色々なパラダイムがあることを示す。
- ・「社会科教師教育者像を広げてゆく論文」にする。

前段階で設定した「教師教育者のアイデンティティ」という大枠を、この段階では、多様な社会科教師教育者像を示す軸で考えてゆくこととした。すなわち、本研究のテーマを社会科教師教育者が持つ教師教育者としてのアイデンティティの多様性を分析するものと設定した。その後、論文の具体的な論理構成に関する議論へと展開していった。

- ・(TANAKA がCice の論文で示した)「学校と社会の関わり」そのままの章は難しい。前の論文は社会と学校の関係が明確に違った。今回は別のカテゴリーが良い。「学校との関わり」は割と明確に出ている。「社会との関わり」が難しいのではないのか。
- ・学校との関わりは社会科教育者像を考えてゆく上で重要なのではないのか。
- ・学校との関わりに焦点化をして、社会的責任と分けてみるのはどうか？社会科の目標を教師が支援するために、研究者は学校に関わっている。
- ・ヴァンスレッドライトは子どもの社会文化的な意識を育てるために社会科教育を考える。社会との距離感も重要ではないのか。教師を介して社会を考える。直接社会を捉える、子どもを介して・・・など、社会との距離感。社会と実線で結ばれた場合と、点線で結ぶ場合があるのではないのか。
- ・社会的責任はどのように定義をするのか。

- ・確かに、若手は地域への直接的な社会的責任は言いづらい。インフォーマルなもののみ。
- ・ジェームスは社会的責任について語っている。社会科の研究領域に対しても責任を語っている。
- ・社会的責任＝「誰のためにやっているか？」
- ・ジェニスは次世代の教師を教育すると言っている。
- ・「社会科の目標＝社会科とは」、「学校との関わり・社会的責任＝教師教育者とは」、この2つを合わせて、社会科教師教育者とはということを考える。この2つの関係を見る。あとは出自・所属・取り巻く背景。

上記の議論の中で、社会科観として社会科の目標を論じ、教師教育者観として社会的責任を論じる形が合意された。その上で複数の論文構成が提案され、皆で検討した後、次の議論へと展開した。

- ・最初に取り上げる人の活動を出すのか、最初に哲学の多様性を押し出すのか？
- ・ジェニスは scopus で出てこない。ジェームスは 15 件で 57 件の被引用。ヴァンスレッドライトは 28 件、341 の被引用。この辺りもスケジュール（講義数の数）と業績の関係として使えるかもしれない。
- ・社会科を通して社会的正義を追究する、子どもの・・・など、社会科の目標の相違で育てる教師像も変わる。

上記の議論を経た結果、本論文は①教師教育者の背景（研究関心と勤務実態の分析）、②社会科の目標から見る教師教育者としての使命（社会科観の分析）、③社会的責任から見る教師教育者としての使命（教師教育者観の分析）、という3つの軸を取ることにした。以下、本論文では上記の3つの視点から整理してゆく。

2. 研究対象の背景

（1）研究関心、研究業績、出自

第一に、この研究は、3名の教師教育者の研究関心に焦点を当てている。インタビューは、彼らに次のような質問をしている。すなわち、「あなたのここ5年のおすすめの執筆物を3つ教えてください」と。3名の教師教育者は、研究の過程や関心を含めて、あるいは自らの出自と関連させながら、自らの著作について語っている。

ヴァンスレッドライトは、「子どもがいかに歴史

を学ぶのか知らなければなりません」と語り、教授方法よりも子どもの学びを第一に考え、教室中心の調査研究をしている。1つ目のハンドブックの論考は、歴史における認識論的な認知に関してまとめたものである。引用はされていないが、難しく、興味深いチャレンジだったと語っている。2つ目の書籍は、スタンダード・テスト時代において子どもの歴史的思考と理解をいかに評価するかに焦点を当てた研究で、これにより人々との多くの興味深い対話を作ることができ、現在もとても楽しんでいると語る。3つ目の書籍では、熟練教師のケーススタディによるリサーチ・ベースドの歴史的思考研究を提案しており、この書籍も人々との間で多くの議論を引き起こしており、好きな著作であると語っている。彼は、歴史教育に関心のある大学教員に向けて主に書いており、研究者間の議論をすることを一つの目的としている。

- ・ Epistemic cognition in history. *Handbook of epistemic cognition*, 2016 (Co)
- ・ *Assessing historical thinking and understanding: Innovative idea for new standards*, 2014
- ・ *The challenging of rethinking history education: On practices, theories, and policy*, 2010

ジェームスは、公民教育を専門としており、その主要な対象は研究者であると語っている。1つ目の論文は、5名の研究者のプロジェクトの中心となったデザイン・ベースドの研究である。そこでは9歳～11歳の子どもを対象として信頼の役割について分析しているが、その内容以上に、博士課程の学生と現場教師のチームで取り組み、プロジェクトの困難を共に乗り越えたことを彼女は強調する。2つ目の論文は、教師教育プログラムにおいて原理主義者の学生を教える困難性に関する研究であるが、彼女は、編集委員のパトリシア・エイブリー (Patricia G. Avery) のその研究自体に対する驚きや CUFA⁽⁶⁾ での多くのセッションを持てたことの面白さについて語っている。3つ目は、タイトルの通り、変化志向型のサービス・ラーニングの定性分析に関する論文であるが、この研究を語る際に、彼女は、同僚のスーザン・アイバーソン (Susan V. Iverson) と共同でこれまで多くの仕事をしてきたことを回想する。

- Examining the role of trust in shaping children's approaches to peer dialogue. *Teachers College Record*, in press (2017, Co)
- "Democracy is the devil's snare": Theological certainty and democratic teacher education. *Theory and Research in Social Education*, 2010
- Self-authoring a civic identity: A qualitative analysis of change-oriented service learning. *Journal of Student Affairs Research and Practice*, 2013 (Co)

彼女は、共に研究をする同僚や博士課程の院生、現場教師など他者と関わりながらプロジェクトを進めることを強調し、また、「(研究者に向けて書くことを) より難しく感じ、そのことが私を一層駆り立ててくれて、私がその仕事から学び、私が対話の一部、学問的な対話の一部になることを楽しんでいきます」と語っており、専門的な共同体を構築していくことに研究の意義を見出している。

ジェニス は、批判的な **mixed-race** の研究を専門領域としている。これは、グロリア・ラドソン＝ビリングズらの法学を起源とした批判的人種理論のような研究ではなくて、心理学のアイデンティティ研究から派生した研究であり、自らの **mixed-race** の経験を具体的に語り、そこでの人種、ジェンダー、階級、権力などに関する語りがカリキュラムや教授、教育などすべてのことへの影響について考察するものであると彼女は語っている。研究業績について、特に1つ目の書籍や3つ目の論文は、合衆国の教師のほか、**mixed-race** と自認している人々を対象として書かれている。人口統計学上の最大のグループでもあり、ますます複雑なものとなりつつある **mixed-race** の人々の語りを手がかりに、より公正で、公平な世界を構築しようとしている。なお、この研究に着手した背景には、自らの出自の影響も大きくかかわっている。

- *Are you mixed? A war bride's granddaughter's narrative of in-between contested race, gender, class and power*, 2016
- Why has there never been a woman president in the US? An inquiry lesson. *Social Education*, 2016 (Co)
- Am I enough? A multi-race teacher's experience in-between contested race, gender, class, and power. *Narrative of curriculum in the U. S. South: Lives in-between contested race, gender, class and power*, *Special Issue of Journal of*

Curriculum Theorizing, 2013

(2) 勤務時間の配分

第二に、この研究では、3名の教師教育者に対して1週間のスケジュールについて調査し、彼らがどのように勤務時間を配分しているかに焦点を当てている。分析のカテゴリーは、教育 (Teaching)、研究 (Research)、サービス (Service) の3つに便宜的に分けているが、各々解釈の仕方が異なるため、一部注を付している。図1では、3名の教師教育者の教育、研究、サービスの時間配分を示している。彼らは、契約上の勤務形態の説明だけでなく、自らの教師教育者としての役割や社会的責任を含めてその時間配分について語っている。

ヴァンスレッドライトは、スケジュールについて詳細に示すことはしなかったが、2011年以降のノースカロライナ時代の時間配分を、教育 40%、研究 40%、サービス 20%としている。彼の語りによれば、教育に割り当てた時間は、準備、採点、メールのやり取り、面談等で増えることもしばしばあり、研究の時間もデータの分析に何時間もかかるのでこの割合の通りには当然いかないう。

ジェームスの時間配分は、教育 41%、研究 15%、サービス 44%となっている⁽⁷⁾。彼女は、学会の雑誌の査読や地域の学校の指導講師を行っており、サービスの割合が高い。教育に関しては、特に博士課程の院生の指導に力を入れている。彼女は、「独立した研究の多くの機会を作って、自身の研究プロジェクトに院生を連れていき、一緒にデータを分析し、共同で執筆します」と語り、メンター制度の重要性を強調し、学生と共に活動しながら研究を進めていくことが重要であるとする。

ジェニスは、教育 82%、研究 14%、サービス 4%となっている⁽⁸⁾。彼女は、クリニカル准教授として学校現場に常駐する大学教員であり、大学の教員志望学生と高校生に対して授業を行っており、多くの時間を教育に費やしている。彼女は、「私の仕事の『中間的な媒介性 (in-between-ness)』と呼ばれるこの性質を利用し、私はそれを高校の教師と教師教育者との間に立ってナビゲートするものとして考えており、日々の基盤として二つの文化空間で生きていかなければならない私自身の葛藤を通してこの種の仕事にその理論を活用しようと

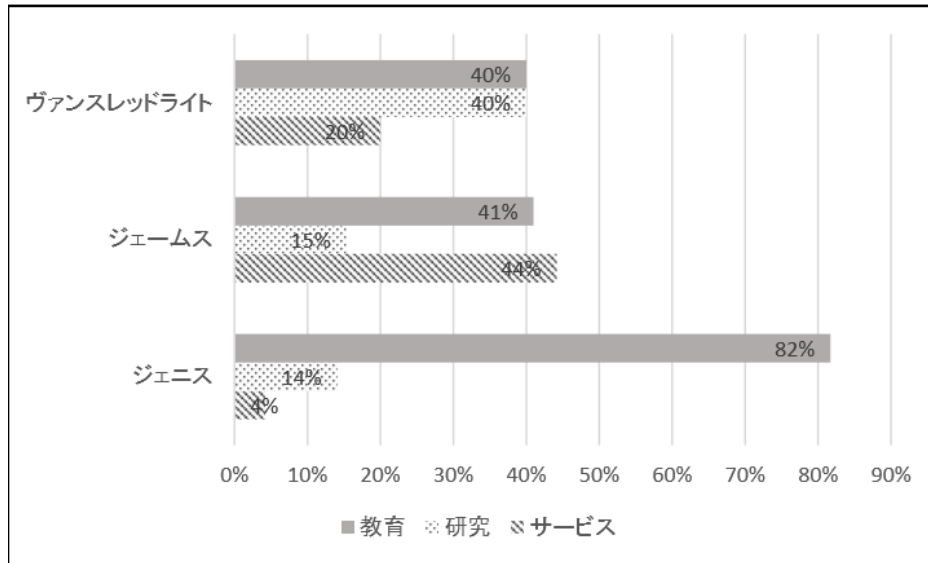


図1 3名の教師教育者の教育・研究・サービスの時間配分（筆者作成）

しています」と語っており、勤務上、研究することが求められていないことを嘆きつつも、彼女の特異な職務の意義を自覚的、肯定的に捉えている。

3. 社会科の目標から見る教科観

ここでは、3名の教師教育者が、どのような背景から如何に教科観を捉えているのかを、社会科の目標に関する語りから明らかにする。インタビューで「あなたは「社会科」の目標を何だと思えますか」と尋ねた際のプロトコルを提示する。

いずれのプロトコルでも、社会科の目標について論じている箇所には二重線を、目標の背景にある認識には下線を、行動してきたことには波線を付し、語りに出てくる人は斜体にした。

（1）ヴァンスレッドライトの社会科の目標観

ヴァンスレッドライトは、社会科の目標について次のように論じていた。

①私は社会科教育における我々の仕事は子どもが可能な限り全てを理解するのを手伝うことであると思えます。合衆国では、幼稚園から第12学年まで、子どもが知りたいと思うことの多くを与えています。それは大人によって動かされる世界のことです。彼らは世界がどのように作用するのかを知りたいと望みます。それは、なぜ大人はそうに選択をするのか、なぜある方法はその

ように組織化されるのか、といったことです。②子どもはあらゆる経験したことについて知ることを望み、理論と理解を得ることを望みます。③我々の仕事は彼らに手を貸すことです。教師としての我々の仕事は、世界はどのように筋道が立つか、あるいはどのようなときに筋道が立たないかについて、彼らが理解するのを手助けすることです。これは、時にはうまくいき、時にはうまくいかず、時には悲しく、時には嬉しく、時には不快です。④出会った全てのものを子どもは知りたがり、我々にはそれらについて彼らに教える責任があると考えます。

別の箇所では、次のように論じていた。

⑤私は学問が重要であると思えます。私は子どもが地理について知ることを望みます。私は子どもが歴史について知ることを望みます。私は子どもが、騙されないように、経済学について知ることを望みます。子どもはこれらの内容を獲得していません。そうです、私は子どもが知ることを望みます。そして⑥私は大人として彼らを助ける義務を持っていると考えます。そうでなければ、何を選択できるでしょうか。⑦子どもは理論を開発しますが、それらは非常に狭く、偏狭的です。私は彼らが間違っているとはいいいません。ただ、もしあなたが、彼らがより広い世界があることを理解するのを助けなければ、彼らは非常に狭い状態にとどまるのです。子どもは狭い心を持っています。そして⑧我々には彼らの心をもっと大きくする必要があります。それは大きな世界です。

ヴァンスレッドライトは、社会科の目標を、子どもが世界を理解するのを手助けすることであると捉えており、このことに責任や大人としての義務を感じている（二重線①③④⑥⑧）。この目標観の背景には、子どもは、大人の世界を知りたがるが、支援しなければ、子どもは狭い認識のままに留まってしまうという子ども観がある（下線②⑦）。「子ども（＝彼ら）」と「大人（＝我々）」という対比の語りに象徴されるように、子どもが大人の世界へ参加することを重視している。また、学問も重視しており（下線⑤）、子ども観をもとにした目標観も、研究者として心理学の視点から探究してきた成果が反映されているとみることができる。

（2）ジェームスの社会科の目標観

ジェームスは、次のように論じていた。

私の意見では、①社会科の目標はほんの少し生徒の世界を広げて、彼らに世界について考える異なった方法を紹介すること、少なくとも異なった信念システムと異なった歴史と位置を経験する異なった方法があることを認識する中で、彼らを極めて身近な家庭の文脈を越えて動かすことになるでしょう。そして、これは世界の一部になることであって、私が考えるには、もし彼らがそれらを理解すれば、彼らはもっと良い備えができるようになると思います。それは幅広い目標、一種の高尚な目標です。しかし私が考えるに、②それ（＝社会科）は互いに敬意を持って協力的に共生する方法と、お互いを最もよく理解できる方法を我々に教えると思います。

この背景については、次のように論じていた。

③私は非常に多様性に富んだエリアで育ち、そして、本当にたくさんの異なった国から来て異なった言語を話す、同僚や子ども、隣人と共に働きました。けれども私は同じく暴力が人々のグループの間ではたらくのを見ました。そして私自身、学生の時に、コミュニティが不寛容であることを理解することの重要性について書き、そのことが、私が教えるようになった理由の一つであると思います。そして④私は、ギャングの活動と貧困といったようなことだらけであった非常に難しい問題のあった近隣へ、教えるために戻りました。それで私は社会科が私に適しているように思いました。なぜなら、⑤社会科の目的は、あなたもご存じの通り、ある種のシティズンシップ教育とコミュニティを築くということであ

り、このことは、私にとっては正しいことであると感じられたからです。

ジェームスは、社会科の目標を、生徒の世界を広げて異なった考え方を認識できるようにすることと捉えていた（二重線①）。このように、生徒が異なる視点を獲得しながら世界へと参加することを重視している。この目標の根底には、他者との共生や、コミュニティを築くという社会科の理念がある（下線②⑤）。背景には、多様な文化を持つ人と出会い、不寛容な社会に問題を感じてきた自身の経験がある（下線③）。社会への疑問から実際に問題の多い地域で教壇にも立っている（波線④）。

（3）ジェニスの社会科の目標観

ジェニスは次のように論じていた。

おそらく他の人の言う社会科とはかけ離れているかもしれませんが、私は本当に、①社会科教育は世界をいっそう公正で公平な場所にしようとするに関わりがあると思います。我々は、②実際に世界で何が起きているかを考え、分析するような市民をもっと育てようとすることで、そうすることができます。歴史や地理に注意を払うこと、これらは全て、我々がどのようにしてここまで至り、どのようにして前進しながらよりよくするために実際に改善できるかということであります。そして、しばしば障壁があるように思われますが、③教育と教育を受けることができる子どもを持つこと、特に、最も底辺の人が最も悪い教育を受けるような我々の国では、最も質の高い教育は、より公正な世界をつくるといえるでしょう。私は、これは問題の一部であると考えています。④このことが、私が教室に戻り、子どもと一緒に時間を過ごす必要があるように感じる理由の一部であり、もし私が現在、素晴らしい教師であるならば、私はなぜ教室から離れるのでしょうか。

ジェニスは、社会科を公正な世界を築くものと捉え、世界で何が起きているかを考え、分析するような市民を育成することを重視していた（二重線①②）。問題意識の根底には、現在の米国の教育における不公正な現実があり（下線③）、ジェニスは、自分自身も「素晴らしい教師」であり続けるために、教室に戻り、子どもと一緒に過ごす時間を重視している（波線④）。このように、ジェニスの目標観は社会改良の視点を有しており、自身

も教育実践者として問題の解決に取り組んでいる。

（4）小括

以上のように、3名で目標観は大きく異なっている。ヴァンスレッドライトは、研究者として探究している子ども観を背景にしながら目標を設定していた。一方、ジェームスとジェニスの場合は、不寛容で不公正な社会への問題意識を前提にしており、両者とも学校で「教える」という実践を通して社会正義の実現をはかる経験を有していた。このように子どもの認識（社会への参入）を重視する目標か、社会的な課題の解決（社会の改良）を重視する目標かという相違がみられる。この目標に対しても、学問で貢献することにより比重を置くか（ヴァンスレッドライト）、教育実践で貢献することにより比重を置くか（ジェームス、ジェニス）、それぞれ比重の置き方に相違がみられる。

4. 社会的責任から見る教師教育者としての使命

ここでは、3名の教師教育者が、自身の社会的責任をどのように捉えているのかを、インタビューでの語りから明らかにする。

いずれのプロトコルでも、社会的責任について論じている箇所には二重線を付した。

（1）ヴァンスレッドライトの社会的責任の捉え

ヴァンスレッドライトは、自身の社会的責任について次のように論じていた。

私は、生涯にわたって教育に関わっており、最初は生徒として、今では大人として教育に従事しています。①私は教師でしたが、その後、教授になって、そして（定年後の）今でも教えています。したがって、②私は自分の責任を長い間（教育に関わって）努力することだと定義しています。③私は、教師として実際に社会科を教えることに貢献してきましたし、④子どもたちの社会的世界、社会文化的世界を広げる手助けをするために、学校において子どもたちと働いてきました。⑤私は、大人として、子どもと一緒に働く教師と働いています。私は、教授として、子どもと一緒に働く大人と一緒に働いています。したがって、私は一歩ずつ（子どもから）遠ざかっていますが、私はずっと（子どものために）働いてお

り、先ほど言ったことに戻るのです。

ヴァンスレッドライトは、「子どもたちの社会的世界、社会文化的世界を広げる手助け」をするために、教育に関わり続けることを自身の社会的責任と捉えている（二重線①②③④⑤）。教師の頃は、直接、子どもたちに社会科授業をすることで責任を果たし（二重線①③）、大学教員になって以降は、「子どもと一緒に働く教師」たちと協働することで、間接的に子どもの教育に従事し、自身の社会的責任を果たしている（二重線①⑤）。彼は、教育者・研究者の役割として、子どもの教育に従事するというよりも、「大人」として「子ども」の「社会的世界、社会文化的世界を広げる手助けをすること」を社会的な責任と捉えていると考えられる。あくまで、教育や研究は手段となっている。

（2）ジェームスの社会的責任の捉え

ジェームスは次のように論じていた。

大きな問いですね。それは、多層的だと思います。①私は学校の生徒に対して責任を持っており、私の活動はつねに彼らに気持ちが向けられています。これが最も重要な責任だと思います。②また教師に対しても責任を負っています。教師とは私が育てている教師に限らず、現に働いている教師もそうです。私は、彼らが私のことをパートナーとみて欲しいので、教師たちを支援しメンタリングし、また彼らから学びたいし、協働することも望んでいます。したがって、私自身、彼らがしている活動のパートナーだと考えています。③私は大学に対しても責任を負っています。ベストを尽くし学生を指導し、大学の活動に参加し、外のコミュニティや学会では大学の顔となり、大学のことをよく考えます。④社会科や公民教育といった私の研究領域にも責任を負っています。研究に全力を尽くし、思慮深くそのコミュニティや対話に参加することを試み、そして前進することに挑戦します。論文の査読者やメンターになること、他の研究者を支援したり、フィードバックを与えたりすることで、私たちの研究分野を強化する活動も行います。そして、⑤私の学生に対しても責任を負っています。彼らがよりよい研究者や教師教育者になれるように援助するのです。

ジェームスは、社会的責任は多層的であるとして、最も重要なことは、「学校の生徒に対して」（二重線①）としている。この他に、「教師（実習生を

含む)」「(二重線②)」、「大学」(二重線③)、「研究領域」(二重線④)、「(博士課程の)学生」(二重線⑤)に対して責任があるという。また、地域の民間歴史研究団体等にも関わり、社会貢献もしている。

彼女は、教師や学生等を下位の存在(啓蒙対象)として見なすのではなく、あくまで「パートナー」であり、「対等」に学んでいく存在であると強調している。教師に対しては、メンタリングを実施し、博士課程の学生に対しては、「よりよい研究者や教師教育者」になって欲しいといった願いを持ち、その援助をしているという。

こうした他者との関係性(信頼性)を重視する姿勢は、研究において、学校に関わる際にも貫かれており、以下のように語っている。

原則として、外に出て関係を構築するのは、私の責任です。そのため、私は学校に行き、大抵はサービスを提供することから始めて、各種のリソースを学校に持ち込み、教師を支援するために学校で過ごすことを申し出ます。そして、時間をかけて、何人かの教師や管理職と信頼関係を構築していきます。私の2年をかけた研究プロジェクトは、このような関係性から生まれたものです。(…略…)学校現場で授業を教えることもありました。

(3) ジェニスの社会的責任の捉え

ジェニスは次のように論じていた。

①私の責任、それは何が起きたとしても、自分の能力の限り、そして自分のベストをつくして彼らを教師に養成することです。

ジェニスは、教員養成を自身の社会的責任と捉えている(二重線①)。また、教員養成において、二つの文化的に異なる人々の集団を結びつけることを実践しており、そこに自身の存在意義を見いだしている。こうした選択は、境界越境者としての彼女の経験に由来している(二重線②③)。

②私は、S高校(生徒の多くは有色人種)の生徒と所属大学(学生の多くは白人)の教師志望学生を結びつけることで、二つの文化的に異なる人々の集団を結びつけることで私は自身の存在を意味づけています。(…略…)

③その種の仕事をする私の選択は、私の存在や私がその世界で多様なレンズを通して物事を見る境界越境者としていかに経験してきたかということからまさに生じています。

(4) 小括

ヴァンスレッドライトとジェームスは、社会的責任として、共通に「子ども」や「生徒」を育てるといった語りが見られた。ただし、直接的に「子ども」を教えるのではなく、教師(教師志望学生を含む)や博士課程の学生(研究者・教師教育者)等に関わり協働し、彼らの成長を援助することで、間接的に責任を果たそうとしていた。なお、ヴァンスレッドライトは、自身のこれまでの人生を踏まえた俯瞰的な語りとなっており、ジェームスは現在の状況を詳細に語るものとなっていた。

一方、ジェニスは、教員養成に最大の責任を見出していた。彼女も大学に所属しているが、学校現場に「クリニカル准教授」として常駐し、実際に社会科授業を担当しながら、教育実習生の指導をおこなう役割となっている。こうした立場が、前者2名との相違の背景にある。

3名の社会的責任の捉えは、彼(彼女)らの社会観や大学における立場の違いに由来・規定されていると思われる。

5. おわりにー3名の professional identityは何かー

ここまでの3つの分析(①研究関心と勤務実態の分析、②社会科観の分析、③教師教育者観の分析)を整理し、④教師教育者の在り方を抽出する。その上で、これら4つの分析を統合し、それを professional identity の様相(内実)として提示する。3名の様相を対照表として示したのが表1である。以下、具体的に説明しよう。なお、【 】は分析カテゴリーを示す。

ヴァンスレッドライトは、「子どもの(社会文化的)世界の拡大」を【社会科の目標】として考えており、その達成を「手助け」することが【社会的責任】であるとした。具体的には、「教師や院生(教師教育者)の指導」に焦点化し、子どもに間接的に関わることで、その責任を果たしていた。

そして、【研究関心】にみられるように、彼の研究は、教室中心の調査研究によって、「子どもの歴史の学びや認識」を理解しようとするものである。それは、いわば、彼のもつ【社会科の目標】

である「子どもの社会文化的世界の拡大」の達成への寄与を意図したものであると解される。

また、【勤務時間の配分】は、40（教育）：40（研究）：20（サービス）と申告し、【社会科の目標】を教育と研究の両方から達成しようとしており、自覚的に教育と研究を重視していると考えられる。

以上より、ヴァンスレッドライトの教師教育者の在り方として、彼のもつ【社会科の目標】を達成するための「子ども」「教師」「教師教育者」の《指導者（supervisor）》としての側面がよく出ていえるのではないだろうか。

ジェームスは、「子どもや他の人々と共にコミュニティを構築する」ことを【社会科の目標】として考えている。そして、その達成のために、【社会的責任】を「多層的な対象（生徒、教師、大学、研究領域、博士課程の指導学生）との協働と対話」に焦点化していた。このように、彼女は、「能動的な主体者」として社会科教育に関わろうとする点において、先ほどみてきたヴァンスレッドライトの責任と共通している部分がみられる。

そして、彼女の【研究関心】は「市民のコミュニティの構築」にある。そのために、共同研究者と関わり、プロジェクトを進めながら、「専門的な共同体」を構築していくことに、彼女は研究の意義を見いだしている。

また、【勤務時間の配分】は、41（教育）：15（研

究）：44（サービス）と申告しているように、関係性（信頼性）の構築を重視しているため、他の2名と比べて、自覚的にサービス（多様な層との関わり）を重視していると考えられる。

以上より、ジェームスの教師教育者の在り方は、関係性（信頼性）の構築を目指した多様な層への《助言者（mentor）》としての側面がよく出ていえるのではないだろうか。

ジェニスは、「子どもと共にコミュニティの認識を再構築する」ことを【社会科の目標】として考えている。このように、「子ども（市民）の現実世界の再構築」を目指すという点においては、先ほどみたジェームスの目標と共通している部分がみられる。

そして、【社会的責任】を教員養成の実践において異なる文化を結びつける役割に焦点化していた。このように、彼女は、「媒介者」として社会科教育に関わろうとする点において、先ほどの2名の責任と異なっている。

これらの【社会科の目標】と【社会的責任】の根源には、彼女の【研究関心】である「市民のより公正・公平な世界の認識と構築」と自身の出自があると考えられる。

また、【勤務時間の配分】は、82（教育）：14（研究）：4（サービス）と申告しているように、他の2人と比べて、自覚的に突出して教育を重視して

表1 3名の教師教育者の Professional Identity の様相（筆者作成）

分析カテゴリー	ヴァンスレッドライト	ジェームス	ジェニス
研究関心	子どもの歴史の学びや認識	市民のコミュニティの構築	市民のより公正・公平な世界の認識と構築
勤務時間の配分 教育：研究：サービス	40：40：20	41：15：44	82：14：4
社会科の目標	子どもの社会文化的世界の拡大	子ども（市民）の現実世界の再構築	
		子どもや他の人々と共にコミュニティを構築する	子どもと共にコミュニティの認識を再構築する
社会的責任	能動的な主体者としての社会科教育への関わり		媒介者としての社会科教育への関わり（異なる文化集団—高校の教師と教師教育者、教員志望学生と高校生—を結びつける役割に焦点化）
	教師や院生（教師教育者）の指導に焦点化（子どもには間接的に関わる）	多層的な対象（生徒、教師、研究者、院生（教師教育者））との協働と対話に焦点化	
教師教育者の在り方	指導者（supervisor）	助言者（mentor）	媒介者（mediator）

いる。それは、彼女が置かれているクリニカル准教授という立場が最大の要因と推察される。

以上より、ジェニスの教師教育者の在り方は、現場の教師と教師教育者との間や彼女が教えている教員志望学生と高校生との間を行き来し、方向付ける《媒介者 (mediator) 》としての側面がよく出ていると言えるのではないだろうか。

上記のとおり、3名の professional identity を分析した結果、米国の同じ大学で社会科教育に関わっているのにも拘わらず、多様な形が現れていた。

そして、その多様性から、各々の professional identity は、彼/彼女らのもつ社会観、教育観、研究観、大学における立場の差異によって現れていることが浮かび上がってきた。以上の多様性は、旧来の教師教育者の像、もしくは観念に対して、揺さぶりをかけ、それらをつくりかえていくこと、そのことによって、「教師教育者」という存在の可能性を広げていくものと成り得ることを示唆している。わが国においても、教師教育者の役割が変革期に差し掛かりつつある昨今、この professional identity という観点はますます重要性を増してくるのではなかろうか。

【註】

- (1) 本研究は、草原和博（広島大学）を代表とする科研「教科教育学のパラダイムと社会的責任の国際比較—社会科教育研究者が果たす役割とは—」として進めている。研究は、同様の調査を日本、米国、英国、ドイツ、フィンランド、中国、韓国で行い、27年度、28年度、29年度に3回のシンポジウムを開催している。
- (2) 後藤賢次郎 (2016). 「人文・社会諸科学者の社会科教育観」『山梨大学教育人間科学部紀要』第17巻, pp.109-120. Tanaka, N., Korhonen, R., Heino, T. (in press). “Professors’ views regarding their professional careers, identities, and educational work-Comparative research between Japan and Finland-”, *Education, Citizenship and Social Justice: Innovation Practice, Children’s Identity and Citizenship in Europe*.

- (3) インタビューの翻訳は、本科研の中間成果報告会資料集も参照しており、その翻訳には、広島大学大学院生の山本綾と吉川友則が従事した。「教科教育学研究のパラダイム」中間成果報告会発表資料、2017年3月4日（文部科学省科学研究費基盤研究 (B) 「教科教育学のパラダイムと社会的責任の国際比較—社会科教育研究者が果たす役割とは—」：研究代表者草原和博）。

- (4) 方法論については、Creswell, J.W. (2007). *Qualitative inquiry and research design: Choosing among five approaches*. Thousand Oaks: Sage. Patton, M.Q. (2002). *Qualitative research and evaluation methods*, Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Makiaia, A.S., Ragoonaden, K., Wang, J.S., Leng, L. (2017). Developing an Inquiry Stance in Diverse Teacher Candidates: A Self-Study By Four Culturally, Ethnically, and Linguistically Diverse Teacher Educators, *The Routledge International Handbook of Philosophy for Children*, Routledge., 参照。

- (5) 同様の方法論を用いて、日本人研究者2名とフィンランド研究者2名の比較研究を実施している。詳細は Tanaka et al., 前掲書 (2)。
- (6) NCSS（全米社会科協議会）の下部組織 College and University Faculty Assembly の略称であり、大学教員や研究者によって構成されている。*Theory and Research in Social Education* を発行している。
- (7) ジェームスは、「教育」に授業準備、学部授業、博士指導、夜間授業を、「サービス」に学会誌の査読、会議、地域の学校への指導講師を割り当てている。
- (8) ジェニスは、「教育」に授業準備、大学生への授業、高校生への授業を割り当てている。

